

名詞の個体性と文脈の連続性は中国語の語彙的結束性に影響を与えるか

—日本語との比較を通して—

陳嬾如 (チンエンジョ)・台湾 静宜大学

本研究は定冠詞を持たない言語である日中両言語を対象として、両言語における語彙的結束性の異同、およびそれに影響を与える要因について検討した。その結果、日本語の語彙的結束性に影響を与える名詞の個体性は、中国語における影響は観察されなかった。一方で、両言語はともに、前後文脈の連続性に影響を受けていることがわかった。

1. 研究の背景と残された課題

文の結束性には、大きく定冠詞、指示詞などの文法的なマーカーを通して実現される文法的結束性 (eg. (1a) の「その本」、もしくは「それ」) と、語の繰り返し (以下、再叙) などを通して実現される語彙的結束性 (eg. (1a) の「本」) がある。

(1) a. フレッドが教室である面白い本の議論をしていた。私はその後、彼と {その / \emptyset } 本 について議論をした。

b. Fred was discussing an interesting book in his class. I went to discuss {the / * \emptyset } book with him afterwards. (庵 2007)

(1) のように、定冠詞を持たない日本語 (1a) では、定冠詞を持つ英語 (1b) と異なり、文脈内で既出である同一名詞の指示詞は潜在的に省略可能である。庵 (2007) では、指示対象が定可能性の低い抽象名詞の場合、指示詞が省略されにくいと指摘されている。

次に中国語は定冠詞を持たない点において、日本語と同様である。このことから、中国語でも「 \emptyset +本」のように再叙が可能だと予想される。しかし、史 (2008) は、この予想に反し、中国語では名詞の定性が低いため、指示対象が普通名詞、抽象名詞を問わず、指示詞が省略できないと述べている。それに対し、陳 (2014a) では先行詞が単数以外の場合においては、中国語でも指示詞の省略可能性が高まると指摘した。また、日本語母語話者は、指示対象が個体性の高い人名詞・生物名詞の場合に、再叙に対する許容度が高いが、中国語母語話者は、照応詞が名詞複数形の場合、許容度が高いという違いを報告している (陳 2014b)。さらに、日中両言語はともに叙述の類型において事象叙述の方が属性叙述より再叙に対する許容度が高いと述べられている (陳 2016)。しかし、陳 (2014b) は調査文が少なく、叙述の類型も統制されていないという問題点がある。加えて、陳 (2016) は、叙述の類型について論じたが、指示対象が人名詞のみであった。

2. 研究課題と調査概要

先行研究の指摘を踏まえ、本研究は次の3つの課題を設けた。

課題①：中国語において、同じ事象叙述の条件の下、指示対象の名詞の個体性の違い (人名詞、生物名詞、モノ名詞) は再叙の許容度に影響を与えるのか。

課題②：中国語においては、指示対象が個体性の低い名詞でも、前後文脈の連続性の違いによって、再叙の許容度が異なるのか。

課題③：語彙的結束性について、中国語と日本語の共通点と相違点はどこか、またなぜそうなるのか。

課題①では、人名詞、生物名詞、モノ名詞の事象叙述文を3問ずつ作成し、それぞれ「指示単数形（那+X+N）」、「指示複数形（那些+N）」、「裸の名詞（0+N）」「名詞複数形（0+Np1）」に分け、計32問を作成した。課題②では、モノ名詞の事象叙述文（5問）と連続性高低を操作した文脈とを組み合わせ、照応詞を「那+X+N」、「0+N」に分けたものを作成した（計20問）。課題①と②は日本語学校および大学に在籍する中国語話者（24名/27名）を対象に質問紙調査を実施した。課題③については陳（投稿中）の結果と比較した。

3. 結果と分析

課題①では、叙述の種類が事象叙述の場合、中国語は名詞の個性性の高低を問わず、人名詞の名詞複数形（男生們（男たち））による再叙のみ許容度が高いことがわかった。

(2) 隔壁房間裡有男生。{那個男生/那些男生/?? 男生/男生們} 正在看電視。

(直訳：隣の部屋に男がいる。{その男/それらの男/男/男たち} がテレビを見ている。)

(3) 鄰居的貓到我家來玩。{那只貓/那些貓/? 貓/? 貓兒們} 津津有味的吃完了我餵的小魚乾。(直訳：隣の猫が我が家に遊びに来た。{その猫/それらの猫/猫/猫たち} は私があげた干し魚をおいしそうに食べた。)

(4) 我昨天買了雜誌，{那本雜誌/那些雜誌/? 雜誌} 借給了田中先生。

(直訳：私は昨日雑誌を買った。{その雑誌/それらの雑誌/雑誌} は田中さんに貸した。)

(2) - (4) からわかることは、中国語では先行詞と照応詞がともに個体のものと解釈されたとしても、数の同定ができない場合は、同じ指示対象として解釈されにくいということである。この結果は陳(2014b)の結果を支持しており、裸の名詞が単数も複数も解釈できることに起因すると考えられる。課題②では、名詞複数形の接辞を持たない中国語のモノ名詞であっても、「雑誌を買って、読み終えた」のように、前後文脈の連続性が高ければ、裸の名詞による再叙の許容度も高まることがわかった。

(5) 我在書店買了雜誌。因為很有趣，{那本/0} 雜誌在電車裡就看完了。

(直訳：本屋で雑誌を買った。面白かったので、{その/0} 雑誌は帰りの電車で読み終えた。)

(6) 我在書店買了雜誌。{那本/?? 0} 雜誌 昨天開始販售。

(直訳：本屋で雑誌を買った。{その/0} 雑誌は昨日発売された。)

課題③について、日本語では名詞の個性性、文脈の連続性の違いが再叙に影響を与える。一方で、中国語では、文脈の連続性による影響が見られたものの、名詞の個性性による影響は観察されなかった。日中両言語では、再叙の許容度に影響する要因が異なっているが、ともに裸の名詞に対する解釈が関わるという点では共通していると考えられる。

4. 主な参考文献

庵功雄(2007)『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版

史雋(2008)「文脈における日中指示詞の対照研究」『一橋大学留学生センター紀要』11, 65-77. 一橋大学

陳熾如(2014a)「日中両言語における指示詞の省略可能性—名詞の種類を焦点に—」『政大日本研究』第11号, 187-208. 政治大学日本語学科

陳熾如(2014b)「日本語における指示詞の省略可能性—名詞の種類と述語に影響の観点から—」『広島大学教育学研究科紀要』第63号第2部, 261-268. 広島大学教育学研究科

陳熾如(2016)「日中両言語における人名詞の解釈に関する研究—指示詞の省略可能性の観点から—」『広島大学日本語教育研究』第26号, 9-15. 広島大学教育学研究科